

南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡 —ハルベトスワン・テペシ遺跡の第2次調査(2023年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館館長
 ウルダール、ジェラルル シャンルウルファ博物館館長
 下釜 和也 千葉工業大学地球学研究センター研究員
 森脇 涼太 千葉工業大学地球学研究センター研究員
 多田 賢弘 千葉工業大学地球学研究センター研究員
 佐竹 渉 千葉工業大学地球学研究センター研究員
 鈴木 健太 千葉工業大学地球学研究センター研究員
 キュチュカルスラン、ヌルジャン 千葉工業大学地球学研究センター研究員
 新井 才二 東京大学大学院人文社会系研究科助教
 池山 史華 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Exploring a Pre-Pottery Neolithic Hill-top Site: The 2023 Investigations at Harbetsuvan Tepesi, Southeastern Anatolia, Turkey

NISHIAKI, Yoshihiro Director, University Museum, University of Tokyo
 ULUDAĞ, Celal Director, Şanlıurfa Museum
 SHIMOGAMA, Kazuya Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
 MORIWAKI, Ryota Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
 TADA, Toshihiro Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
 SATAKE, Wataru Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
 SUZUKI, Kenta Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
 KÜÇÜKARSLAN, Nurcan Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
 ARAI, Saiji Research Associate, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
 IKEYAMA, Fumika PhD student, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo

1. はじめに

南東アナトリア、シャンルウルファ市近郊に位置するギョベックリ・テペ遺跡において本格的な調査が始まってから、およそ三十年が経とうとしている。そこで明らかになった狩猟採集民による巨石建造物や豊富なシンボリズムは、西アジアにおける初期新石器時代の成立にとどまらず、従来の人類史の理解にも修正を迫るものであるが、その実態は考古学的に十分に明らかにされているとはいえない。

近年になって、ギョベックリ・テペ遺跡の周辺に同時代の新石器時代遺跡が数多く存在していることがわかってきた。それらの遺跡の大多数で、ギョベックリ・テペ遺跡と同じタイプの石柱が発見され、ギョベックリ・テペに代表される先史文化の成立と発展を探る上で注目を集めている。これまでよく知られていなかったシャンルウルファ地方の初期新石器時代を総合的に解明するべく、2019年にトルコ共和国文化観

光省が支援するシャンルウルファ新石器時代研究プロジェクト、通称「タシュ・テペレル・プロジェクト (Taş Tepeler Project)」が組織され、考古学的調査が始まった。それ以来、トルコ隊によるカラハンテペ遺跡の発掘調査を皮切りに(Karul 2021)、サイブルチュ(Özdoğan 2022)、チャクマックテペ(三宅他 2023)、ギュルジュテペ(Erdalkıran et al. 2023)、セフェルテペ(Güldoğan and Uludağ 2022)などで本格的な調査が続いている。

私たちは2022年、千葉工業大学地球学研究センター、東京大学総合研究博物館、ウルファ博物館の共同で、ハルベトスワン・テペシ遺跡の発掘調査を開始した(松井他 2023)。この遺跡はテクテク山地というハラン平原を見下ろす石灰岩丘陵の頂上に位置していて(図1)、カラハンテペ遺跡から約7 km離れた場所にある。カラハンテペ遺跡の規模は10数haとギョベックリ・テペ遺跡に匹敵するのに対し、ハルベトスワン・テペシ遺跡はわずか0.6 haと圧倒的に小さい。



図1 ハルベトスワン・テペシ遺跡の景観。中央右下の遺跡から西方向にハラン平原を望む

私たちの当面の研究課題は、遺跡の規模や集落構造、年代を明らかにするとともに、この小さな遺跡に居住した集団がどういう人々だったのか、ギョベックリ・テペやカラハンテペなどの大規模遺跡の集団との関係はどのようなものだったのか、さらには新石器文化の盛衰に初期完新世における地球環境の変動がどう関わっていたのかを探ることにある。

2. これまでの経緯

ハルベトスワン・テペシ遺跡は2014年、シャンルウルファ博物館が行った遺跡分布調査によって初めて確認された。発見当時、遺跡は盗掘を受けていたため、同博物館を中心とするトルコの調査団が2017年から2019年まで3次にわたって緊急調査を実施した。調査の結果、先土器新石器時代B期(PPNB)の前期にあたる矩形の遺構群が見つかった。遺構には中央に2本の石柱が屹立していて、ギョベックリ・テペ遺跡のPPNB期遺構と類似が認められる。そのため、調査者はハルベトスワン・テペシも祭祀センターであった可能性を提起した(Çelik 2016; Çelik and Uludağ 2020; Çelik and Tosyagülü-Çelik 2020)。

2022年に私たちが行った調査は予備的なものであったが、いくつかの興味深い成果があった。ドローンを用いた地形測量によって遺跡とその直近の地形を詳細に記録した結果、遺跡を形成する人工堆積は厚さ2.4m程度であると推定された。かつてトルコ隊が発掘した矩形の遺構を再発掘したところ、その最も深い部分は地表面から1.5m程度であったため、残りおよそ1mを掘り下げると石灰岩の岩盤に達するものと推定した。遺物の表面採集ではPPNB期前期に位置

付けられる石器のほかに、さらに古い時期にさかのぼるかもしれない細石器も若干数見つかった。これと地形測量の成果を考え合わせると、最下層には未知の古い遺構が眠っている可能性が出てきた。

遺跡の北半を対象にして実施した地中探査(地中レーダー探査と磁気探査)では、遺跡中央部付近に地下遺構と考えられる複数の矩形の磁気異常を検出したほか、遺跡外周付近には集落を囲む周壁のような線状の異常を認めた。もしこれが周壁だとしたら、先土器新石器時代の集落構造と社会を知る上で重要な発見になる。

3. 2023年度の調査

前回の調査成果を踏まえて、2023年の調査では(1)ハルベトスワン・テペシ遺跡で最下層を見つける、(2)トルコ隊が調査した遺構の精査継続、(3)地中探査で検出した「周壁」の有無を確認する、(4)遺跡全面での地中探査の完了の4点を目的とし、2023年9月上旬から9月下旬まで約3週間の日程で発掘調査を実施した。

(1)最下層に到達するためには、上層の石造遺構を取り外す必要がある。そこで、まずは上層の遺構群を精査することから調査は始まった。対象としたのは、2019年までにトルコ隊が調査し、2022年に清掃を終えたD6区(旧K13区)とC6区(旧K5/19区)である(図2)。D6区では、石灰岩礫を積み上げた石壁をもつ半地下式遺構が2つ南北に見つかった。部屋内の堆積を精査したところ、南側の部屋では石壁で仕切られた小部屋で、床と思しき砂利敷きの面が出土した。その直上には、玄武岩製の石杵や磨り石、石灰岩の転礫が乱雑に転がった状態で見つかった。ハルベトスワンの他の発掘区では礫敷の床が報告されているが、砂利床は初めての発見である。この部屋からは、上部に線刻をもつ奇妙な石製品も出土した。

(2)一方、北側の部屋ではそうした床面は見つからなかった。ここでは断面堆積を精査した前年度調査の段階で、石壁に2つの建築段階があることが予想されていた。そこで新しい段階の壁を取り外したところ、古い段階に属する明確な石壁が姿をあらわした(図3)。この発見によって、北側の部屋が2つの時期に区別されることが確認できた。

南北の遺構を取り外していく過程で、これらの遺構の構築法に関して新たな発見があった。2つの遺構の壁の間は50cm程度しかなく、居住空間として利用



図2 2023年の主要な発掘区。左側がC6区(旧K5/19区)、右側がD6区(旧K13区)



図3 D6区北側の部屋の高段階の石壁(北から南を望む)

されていたとは考えにくい(図4)。そうした遺構間の空隙は大きな石灰岩の礫や土壌で充填して意図的に埋めていたと考えられ、そうすることで半地下式の構造物をつくっていたらしい。不規則に投げ込まれた大小の礫には人為的に切り出した方形の大石も混じっていた。また、この中の土壌に混じって、フリント製の尖頭器やビーズ、大型の磨製石器も出土した。

さらに重要な発見は、北側の部屋の床面を探っているときに、円形にめぐる下層の石壁が確認されたことである(図4)。ごく一部しか露出していないが、直径約2.5mの「円形遺構」と推定される。南東アナトリアを含む西アジアの初期新石器時代では、先土器新石器時代A(PPNA)期からPPNB期にかけて円形から矩形へと建築の形状が変化することが知られており、ハルベトスワンのような小規模遺跡でも同様の変化が確認できる可能性が出てきた。残念ながら、今回の調査でこの円形遺構を完掘することはかなわなかったが、以上の成果によってハルベトスワン・テベシ遺跡に少

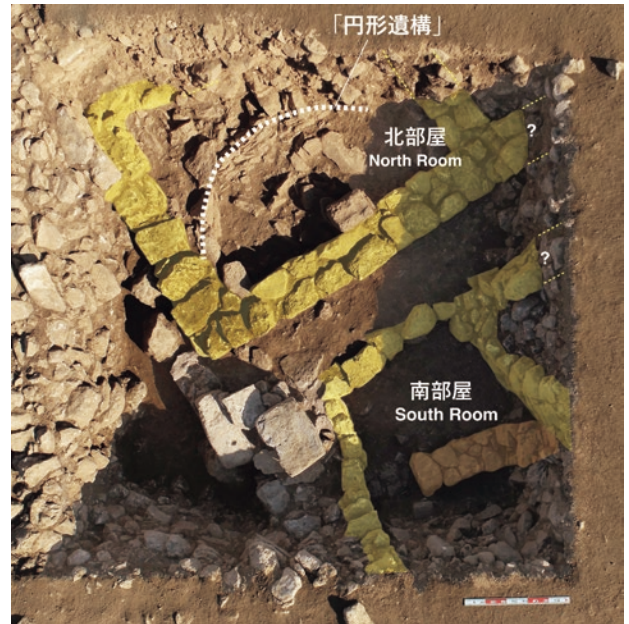


図4 D6区北部屋の内で、円形にめぐる石壁の一部(点線)を発見



図5 C6区の方型遺構では全体構造が明らかになった

なくとも3つの建築層があることが明らかとなった。

C6区はトルコ隊の調査で、一対の石柱と扶壁を備えた方型遺構が見つかった発掘区である。ここで精査を継続したところ、遺構への出入りが西壁部分にあったこと、遺構北西隅に馬蹄形の石造施設があったこと、そして東壁から石柱に向かって2本の壁が存在することなどの新事実を確認できた(図5)。また、ネヴァル・チョリ遺跡などでみられるような石灰漆床が出てくることを期待していたが、遺構内の全面で

検出されたのは大きさが一定しない礫を乱雑に敷いた面であった。この礫敷面の直上では一部で粘土漆喰のような断片が出土したことから、本来は礫敷の上に粘土漆喰があった可能性もある。このように、今回の調査でC6区の方形遺構の構造がほぼ明らかとなった。類例は南東アナトリアのPPNB期に求められるが、この方形遺構はハルベトスワン・テペシ遺跡の他の矩形遺構群とは異なる性格をもっていた可能性が高い。その解明の手がかりとなる遺構内の遺物は過去の調査ですでに掘り尽くされているが、今年度出土した遺物の分析を今後進めるつもりである。

(3) 地中探査で検出された「周壁」状異常の地下に遺構があるかどうかを確かめるため、地中レーダー探査と磁気探査の両方で顕著な異常がみられた遺跡北東のE3区に、4m四方の試掘トレンチを設けた。試掘の結果、地表下数十cmの深さで石灰岩の岩盤が露出した。前年見つかった「周壁」状の異常は、どうやら岩盤に生じた亀裂や陥没に対応していたようだ。その他の異常があった地点も地表からそれほど深くないところに分布しているため、おそらく同様の自然地形を検知したものかもしれない。一方で、探査の異常が地下の石灰岩と堆積物のコントラストを反映していることが確認できた。

(4) 2023年度に継続して行った地中探査のうち、地中レーダー探査は地表面が比較的なだらかな数区画で実施し、磁気探査は遺跡全面で完了することができた。特に磁気探査では、遺丘中央の平坦面から斜面上部にかけて、C6区の遺構と同軸方向の矩形遺構と考えられる磁気異常が広範に分布していることを確認した。これまでの調査でわかっているような小さな矩形遺構が高密度かつ密着して集合している様子が窺えた。それに対して、その周辺にあたる遺丘の傾斜面の地下には明確な矩形の異常は見られなかった。これは、遺丘の範囲のうち傾斜面は二次堆積による土壌堆積を示し、遺構の分布が希薄であることを示唆している。

4. おわりに

今回の調査では遺構と層序に関して興味深い発見があった。さらに、地中探査によって遺跡の地下に眠る遺構のほぼ全容がわかるようになった。しかし、上層の遺構を慎重に取り外しながら調査を行ったため、最下層の遺構に手をつけられなかった。次年度はこの最下層を目指して掘り下げていきたいと考えている。

遺構の発掘や地中探査の他に、出土した石器や磨製

石器、装身具、動物骨の分析を進めている。また、放射性炭素年代測定については、今回、炭化物などの試料を堆積土中から採取して、現在測定作業が進行中である。さらに出土遺物、特にビーズ類を中心とする装身具類は、多様な石材から製作されているが、これらについて可搬型蛍光X線分析装置を用いた化学分析(XRF分析)を開始した。今後データ数を増やししながら、石材の同定を通じて先土器新石器時代の狩猟採集民の交易のあり方も追究していきたい。

第1次調査と同様、調査の実施にあたっては大村幸弘所長をはじめとする中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の皆様から多大なご支援とご協力を賜った。また現地で滞在中には、イスタンブール大学のネジュミ・カルル教授、シャンルウルファ文化遺産保護局のラマザン・バイラン局長、シャンルウルファ博物館のムヒッティン・チチェック副館長やネジフ・ジュカイ氏、ハラン大学のメフメト・オナル教授、そして発掘調査に参加してくれたハラン大学などの卒業生ら、多くの機関および個人にご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

参考文献

- ・ Çelik, B. 2016 A Small-Scale Cult Centre in Southeast Turkey: Harbetsuvan Tepesi. *Documenta Praehistorica* XLIII: 421-428.
- ・ Çelik, B., and C. Uludağ 2020 2017 ve 2018 Yılı Harbetsuvan Tepesi Kazı ve Temizlik Çalışması. 41. *Kazı Sonuçları Toplantısı*, 1. cilt, pp: 337-356. Ankara, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.
- ・ Çelik, B. and H. Tosyagülü-Çelik 2020 Harbetsuvan Tepesi 2019 Yılı Kazı Çalışması. *Karadeniz Uluslararası Bilimsel Dergi* 48: 303-326.
- ・ Erdalkıran, M., C. Avcı, and C. Uludağ 2023 Gürcütepe 2021 Yılı Kazısı. In A. Özme (ed.), 42. *Kazı Sonuçları Toplantısı*, cilt 4, pp. 173-184. Ankara, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.
- ・ Gündoğan, E., and C. Uludağ 2022 "Taş Tepeler" Projesinin Doğudaki Sınır Yerleşmesi Sefertepe İlk Sonuçlar. *Arkeoloji ve Sanat* 171: 13-26.
- ・ Karul, N. 2021 Buried Buildings at Pre-Pottery Neolithic Karahantepe. *Türk Arkeoloji ve Etnografya Dergisi* 82: 21-31.
- ・ Özdoğan, E. 2022 The Sayburç reliefs: a narrative scene from the Neolithic. *Antiquity* 96 (390): 1599-1605.
- ・ 松井孝典・西秋良宏・下釜和也・C. ウルダグ・森脇涼太・多田賢弘・鈴木健太・新井才二 2023「南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡—ハルベトスワン・テペシ遺跡の第一次調査(2022年)」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』9-13頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 三宅裕・板橋悠・F. シャーヒン 2023「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテペ遺跡第2次調査(2022年)」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』14-17頁 日本西アジア考古学会。